

補助動詞「テクル」「テイク」のアスペクトについて

On the Aspect of Japanese Auxiliary Verb “-te kuru” and “-te iku”

内 山 潤

Jun UCHIYAMA

1. はじめに

日本語のアスペクト研究は、奥田（1978）以降、スル形で表わされる完成相とシテイル形で表わされる継続相との対立を中心に進んできた。一方で、シテアル・シテオク・シテクル・シテイク・シテシマウやシハジメル・シオワルなどの形態については、アスペクトの意味を表わすとされつつも、補助的なものとして扱われてきた。

工藤（1995）では、シテアル・シテオク・シテクル・シテイク・シテシマウを、シツヅケル、シハジメルなどの派生動詞と比べると文法化が進んだものとしている。しかし、「スル・シテイルのように、アスペクト対立の典型的な形で、文法化されていると言ひ難いと思われる」として、準アスペクトとして位置付けている。工藤の挙げた根拠は以下の3点である。

- (I) 包括性の欠如－シテアル，シテオク，シテイク，シテクル
 - (II) 他の文法的意味の共在－シテアル，シテオク，シテシマウ
 - (III) アスペクト対立の存在－シテクル（シテイク），シテシマウ
- (I) は、「死んである」「流れておく」「離婚

していく（離婚してくる）」などが言えず、全ての動詞についてスル形との対立を持っているわけではないという指摘である。(II) は、例えばシテアルには「受益性＋意図性」という意味があり、純粋なアスペクトではなく、それ以外の意味も複合的にとらえられているということである。(III) は、例えばシテクルが「シテクル－シテキテイル」というスル－シテイル形のアスペクト対立を持っていることを指摘している。

一方で、スル－シテイルのアスペクト対立について、工藤は、「1 義務性，2 包括性，3 規則性，4 抽象性（一般性），5 パラダイグマティックな対立性，の観点から見て、最も文法化されたものと言える」とし、さらに、テクスト的機能（タクシス）との相関性についても指摘し、研究の中心に置いている。

アスペクトと準アスペクトを区別する工藤の主張について、須田（2010）では、3つの基準ともに、いずれも決定的な基準として見ることは難しい、と指摘している。まず、(I)の包括性については、「命令形の『しろ』と勧誘形の『しよう』をとる動詞と比べれば、『してある』『しておく』『してしまう』の包括性の度あいは、あまりかわらない」と

している。(Ⅱ)の他の文法的意味の共在については、「していた」という形に過去というテンズ的な意味と、叙述というムード的な意味が共存していることを指摘した上で、「形態論的カテゴリーに属する形態論的な形の持つ形態論的な意味であれば、共存していても問題ないが、それ以外の意味であれば問題となるということだろう」としている。

最後に、(Ⅲ)のAspect対立の存在については、これら準Aspect形式のAspect対立が、スルーシテイルとともに三項対立をなすものであれば、共存することはあり得ないとした上で、スルーシテイルとは異なるAspect的な意味の対立であるとするれば、共存することもありうるということを示している。

しかし、実際にテクル・テイクの形にシテイル・シテイタが付いた複合的なAspect形式がどのようなAspectの意味を表わすのかについては十分に検討されていない。須田では、シテクルとシテキテイル、シテイクとシテイッテイルの違いについて、「同じ段階を表わしていて、Aspect的な意味の対立は、過程継続の明示と非明示との対立になっている」と述べるに留まっている。しかし、坂原(1995)で指摘されているように、実際には、シテクルではなくシテキタとシテキテイルと同じ段階を表わすものとして対応している場合も存在している。

- (1) この10年間で、EUを中心に急速に風力発電が普及してきました/*してきます。
- (2) この10年間で、EUを中心に急速に風力発電が普及してきています。

そこで、本稿では、先行研究から、シテクルとシテイクの用法を整理した上で、それがさらにシテイル・シテイタの形になった場合どのようなAspectの意味を表わすのかを

検討していく。なお、分析に使用している例文については、基本的にGoogleの検索によって得られたものである。述語や時間に関する副詞成分以外は、必要に応じて改変を加えている。

2. 先行研究によるシテクル・シテイクの用法

寺村(1984)では、主に文法化の程度により、日本語のAspect形式を、i)動詞の活用形によって表わされる一次形式、ii)動詞のテ形に後接する補助動詞の一部によって表わされる二次形式、iii)動詞の連用形に後接する補助動詞の一部によって表わされる三次形式の3つに大別している。その上で、テクル・テイクについては、二次形式の一つとして分析している。

寺村は、テクル・テイクのAspect用法は、テ型による単なる並立接続と連続していることを指摘している。つまり、テクル・テイクには、テ形によって動詞二つが並立的に結びついたものと、全体が一つの述語として結合し一方が他方に従属して副次的な意味を添えるものがあり、その間には無数の中間段階があるということである。例えばテクルの場合、

- (3) 疲れたから、ちょっとコーヒーを飲んでくる。(寺村1984)

のような「来る」の単独の意味を色濃く残しているものから、

- (4) 気持ちが沈んでくる。(寺村1984)

のような「来る」単独の意味はほぼ失なわれてしまっていて、一体化の進んだものまで、無数の中間段階がある。後者に近いものがAspect形式になる。この性質は、他の2次Aspect形式「テイル、テアル、テオク、テシマウ」が、単なる並立接続とは明確に区別されることから、テクル・テイクの特性である

と言える。

寺村は、実際の文の中でテクル・テイクがアスペクト形式と見なせる基準として、以下の2つを挙げ、

- (i) 「Xが……～テクル」は言えるが、「Xガクル」とはいえないもの
- (ii) ～テクルが、Xの物理的移動ではなく、「XがVスル」という現象への話し手への接近を表わすもの

両条件を満たすものは、アスペクト形式とみなすことができる、としている。

寺村の指摘している通り、テクル、テイクの中には、アスペクト的意味と見なせるものと、もともとの「来る・行く」の意味を色濃く残した空間的な移動を表わすものがある。本研究で対象とするのは、この内アスペクト的意味を表わすものに限る。以下、先行研究において、テクル・テイクのアスペクト的意味がどのように取り上げられてきたかを概観する。

2.1 吉川 (1976) の研究

吉川 (1976) では、テクルのアスペクト的意味を4つ、テイクのアスペクト的意味を3つに分類しており、その内3つについて、テクルとテイクが対応するものであるとしている。まずテクルの「出現の過程」はテイクの「消めつの過程」に対応する。次に「変化の過程」はテクル・テイクが共通して持つアスペクトである。次にテクルの「ある時点までの継続」はテイクの「ある時点からの継続」と対応する。最後にテクルのみが持つ用法として、「過程 (動作・作用) のはじまり」を挙げている。

「出現の過程」「消めつの過程」について、吉川は、「生まれる」や「消える」が本動詞となる文を取り上げ、「補助動詞のない文と、ある文をくらべてみると、動詞が出現の過程

を示すものであれば、『てくる』が、消めつの過程を示すものであれば『ていく』が使われている文の方が自然な日本語という感じがする」と述べている。そして、この用法をテクル・テイクが「その過程に具体的叙述性を与える」と規定している。そして、この用法を取るその他の動詞としては、出現を表わすものとして「あらわれる、うまれる、うかぶ、こみあげる、よみがえる、わく」を、消めつを表わすものとして「かすむ、きえる、しぬ、うしなう」を挙げている。しかし、これらは、その後の研究では空間的なものとして扱われている用法である。このため、本研究でも空間的な用法とし、考察の対象とはしないことにする。

「変化の過程」については、変化動詞で、シタ形では過程を表わせないものにテクルが、ついて過程を表わすようになったものとしている。テイクも同様にこの用法を持つと規定されている。テクルでこの用法を取る動詞としては、「なつく、ふえる、へる、おもくなる、かなしくなる、たてこむ、きたなくなる、ながくなる、はげしくなる、ひくくなる」、テイクでこの用法を取る動詞としては、「かわる、なつく、ます、やせほそる、あつくなる、おもくなる、ちいさくなる」などが挙げられている。

「ある時点までの継続」を表わすテクルについては、「てきた・てきました」の形で、「ある動作・作用が過去においてはじまって、現在まで継続していることをあらわすのである」とされている。また、「ある時点からの継続」を表わすテイクについては、「過去・現在・未来のいずれの時点を基準にしてもその時点から将来の方向へ向かって、ある動作・作用が継続することをあらわす」としている。

さらに、「成長する・育てる」のように数

年に渡る動作作用を表わすスケールの大きな動詞と、「買う・乗る・倒れる」などのスケールの小さな動詞があり、この違いがアスペクトに反映する。具体的には、テクルの場合、スケールの大きい動詞では、「遠い過去からの継続」を表わし、スケールの小さな動詞では、「遠い過去からのくりかえしの継続」または「近い過去からの継続」を表わす。また、テイクの場合も同様に、スケールの大きな動詞では「遠い将来への継続」を、スケールの小さな動詞では、「近い将来への継続」を表わすとされている。

最後に過程の開始を表わすテクルについては、「ばらつく、ふる」などの動詞につくもので、これらの動詞は出現の意味もなく、変化動詞でもないため、出現の過程や変化の過程とは区別されるとしている。さらに、この用法が「ふくらむ、おもくなる、きろくなる、なきたくなる、よくなる」などの変化動詞や「あらわれる」などの出現の過程を表わす動詞について過程のはじまりを表わすことがあることも指摘されている。

2.2 今仁(1990)の研究

今仁(1990)では、テクルとテイクの意味について、移動を表わす場合とアスペクトを表わす場合に大きく分けて、そこに共通して見られる共起パターンを分析している。今仁によれば、移動を表わす場合、本動詞となるものには「送る」のように単独でも二格で方向性を示すことができるものと、「歩く」のように「テクル」か「テイク」を補わなければ二格で方向を表わすことができないものがある。後者は、「テクル」および「テイク」がついて方向を表わす。一方前者は、移動の方向が発話者に向かう場合のみ「テクル」を必要とし、これに「テイク」が付くと順次的あるいは漸時的事態を表すとされている。

前者に属する動詞としては、(a)対象物の輸送・移動に関する動詞(送る、電話をかける、落とす)だけでなく、(b)影響を相手に及ぼす動詞(攻撃する、殴る、警笛を鳴らす)、(c)動作を表わす動詞(座る、笑う)も含まれるとされている。

また、アスペクトを表わす場合については、「降る」のように「ある事態からその逆の事態への移行を表わすものがあり、これは「テクル」によってその事態の発生を表わすが、「テイク」が付いた場合には、やはり順次的・漸時的事態を表すとされている。これに対して「腐る」のような変化を表わす動詞や「守る」のような継続を表わす動詞の場合は、テクルによってその時点までの変化・継続を、テイクによってその時点からの変化・継続を表すとしている。

事態の発生を表わす動詞としては、「発生系は、対象発生である」として、「降る」のような現象の発生を表す動詞と、「分かる、腹が立つ、思い出す」などの心理的な状態の出現を表す動詞が含まれる。また、後者の、変化を表わす動詞としては、「変化系は、主体変化であり、変化の認識(または追認)を表わす」とされ、「腐る・膨らむ」などの他、「冷たくなる」のような「～なる」形式の動詞が属する。継続を表わす動詞としては「守る、続く、続く」などの他、継続的繰り返しを許す動詞「(木が花を)つける、(予算を)繰り越す」も属するとされている。

順次性、漸時性というものもアスペクトの一つとしてとらえることができる。したがって、上記の今仁の議論をアスペクトという観点で整理すると、テクル・テイクの持つアスペクトとしては、以下の4つにまとめられる。

- 1) 客体変化を表わす動詞に「テクル」がついてその変化の発生を表す。

- 2) 主体変化を表わす動詞に「テクル・テイク」がついてある時点まで・からの変化を表わす。
- 3) 継続を表わす動詞に「テクル・テイク」がついてある時点まで・からの継続を表わす。
- 4) 対象物の輸送・移動に関する動詞・影響を相手に及ぼす動詞・動作を表わす動詞・対象発生を表わす動詞に「テイク」がついて順次的・漸時的事態を表わす。

2.3 坂原 (1995) の研究

坂原 (1995) はテクルの用法を、単なる等位構造のテ形接続、等位接続の延長線上で複合動詞化が進んだもの、本動詞が含む移動を強化し、方向を与えるもの、変化の出現を表わす始動アスペクト、行為や事件の継続を表わす継続アスペクトの5つの用法に分類し、分析している。この内、アスペクトに関する用法は、始動アスペクトと継続アスペクトである。

アスペクトに関係する2つの用法について、坂原は、「移動動詞『来る』の表す空間移動やある地点への到着が、時間軸上での事件の継続や生起に投影されると、『来る』はアスペクトを表示するようになる」としており、基本的に空間移動の用法からの拡張であると捉えている。また、本動詞については、始動・継続アスペクトとも、基本的に継続動詞をとり、瞬間動詞の場合は事件の複数性あるいは繰り返しにより、2次的に継続動詞化する必要がある、と主張している。

始動アスペクトをとる動詞について、坂原は、一方向への程度の強弱の変化を表わす無意思性¹⁾の変化動詞としている。また、そのアスペクト的意味については、開始そのものではなく、開始され、依然進行中の変化を

表わすと規定している。このため、「すっかり、完全に」などの完結を含意する程度副詞や、「～までに、以前に」のような終始時点や限界時点を表わす時間副詞とは共起しない。またテイル形で変化の進行を表わし、タ形とテイル形がほとんど意味を変えずに交替できることも指摘している。

さらに、この用法の制限として、以下の3点を挙げている。

- (a) 発話時点より以前や同時の完結点をもつ変化を表わすことができない。
- (b) 変化の生起は現在以降でもよいが、話し手自身の変化の場合過去に限られる。
- (c) 話し手の他人に関係する感情の変化を表わす場合、過去でも使えない。

一方、継続アスペクトについては、本動詞が同じ状態の継続か、同じタイプの事件の繰り返しによる質的变化のない継続の場合であり、無変化の同質的継続を表わすとしている。動詞は意志的でも無意思的でもかまわない。この用法では、始動アスペクトの場合は共起しない継続期間や終始時点を表わす時間副詞とも共起可能である。ただし、継続の終止時点は、現在から過去に遠ざかるにつれ、許容度が落ちることを指摘している。さらに、継続アスペクトの場合は現在以降に始まる継続を表わすことはできない。テイル形については、始動アスペクトの場合と同様、タ形とほぼ同じ解釈になるとされている。

また、テイクによって、テクルとは逆方向の継続アスペクトが表現できることも指摘している。ここで言う逆方向とは、視点の方向、つまりテクルが現在から見た過去から継続を表わすのに対して、現在から見た未来への継続を表していることを指すと思われる。

3. 本研究におけるテクル・テイクのAspect

以上、3つの研究について、テクル・テイクのAspectがどのように分析されてきたかを概観してきた。ここでは、本研究において、テクル・テイクのAspectをどのように分類していくかを述べていく。本研究では、テクル・テイクの持つAspectとして、大きく始動Aspectと過程Aspect、継続Aspectを取りあげる。

始動Aspectは、坂原(1995)によれば、単なる変化の開始だけでなく、「開始されたが、以前進行中の変化という印象も与える」ものである。この定義は妥当なものと考えられるが、どのような動詞が始動Aspectを取り得るかについては、各研究で違いが見られる。

吉川(1976)では、始動Aspectに当る用法を「過程のはじまり」としており、この用法をとる動詞として、「降る、ぱらつく」などの動詞と、変化動詞を挙げている。これに対して、今仁(1990)では、両者を区別し、「降る、ぱらつく」などは「発生系」、変化動詞については「変化系」に分類している。発生系が事態の開始を表わすのに対し、変化系はテクルである時点までの変化を、テイクである時点からの変化を表わすものとしている。最後に、坂原(1995)では、始動Aspectを取る動詞を「一方向での程度の強弱の変化を表す変化動詞」としており、始動Aspectを変化動詞がとるものとしている。

(5) 雨が降ってきた。(今仁1990)

(6) 空が明るくなってきた。(坂原1995)

そこで、どのような動詞が始動Aspectを取り得るかについて考察を行う。

まず、坂原は、「空が明るくなってきた」

という例文で、副詞との共起関係を整理し、厳密に定義しており、変化動詞は始動Aspectを取ると言える。では、坂原では取りあげられていない、「降る」などの動詞にテクルがついた形は、ここで言う始動Aspectとは別なものなのであろうか。「降る」は、工藤(1995)の分類によると、主体動作動詞の「ものの非意思的な動き(現象)動詞」に分類されている。同じカテゴリーに属する動詞としては、「かがやく、ざわめく」などがあり、以下のように始動Aspectの文を作ることができる。

(7) 大室山のススキが白銀色に輝いてきました。

(8) ヘルシンキの文化会館付近の、いつもは静かな通りが急にざわめいてきました。

これを坂原の提示している副詞との共起パターンに当てはめてみると、同じ共起パターンを示す(前文が坂原の例文、後文が置き換えたもの)。

(9) ??空がすっかり明るくなってきた。
／??雨がすっかり降ってきた。

(10) ??空が完全に明るくなってきた。
／??雨が完全に降ってきた。

(11) 空が、20分前から明るくなってきた。
／雨が、20分前から降ってきた。

(12) *空が、10分前まで明るくなってきた。／*雨が、10分前まで降ってきた。

(13) *空が、10分前までに明るくなってきた。／*雨が、10分前までに降ってきた。

(14) *空が、30分間、明るくなってきた。／*雨が、30分間、降ってきた。

(15) ?空が、30分間で、明るくなってきた。／?雨が、20分間で、降ってきた。

以上のことから、本研究では、始動Aspectは、変化動詞および現象を表わす動詞がとり得るものとする。

吉川では、変化動詞には、始動Aspect以外にも、変化の過程というAspectを認めている。これはテクル・テイクの双方に認められるAspectであり、今仁の「変化系」と重なるものである。しかし、少なくとも、テクルについては、吉川自身の挙げている例文を見ても始動Aspectとの区別が不明瞭である。

(16) 候補生の数は、次第に減ってきた。
(吉川の「変化の過程」の例文)

(17) ふた葉の先のほうが黄色くなってきた。(吉川の「過程のはじまり」の例文)

そこで、本研究では両者を区別せずに、共に始動Aspectとして扱うことにする。一方でテイクの持つ「変化の過程」については、そのまま認め、過程Aspectとする。

最後に、継続Aspectについて見ていく。テクルは、「ある時点までの継続」とされ、本動詞の性質については、「継続」もしくは「同じ事象の繰り返しによる継続」とほぼ共通した規定がされている。

(18) 太郎は、戦後からずっと東京で来らしてきた。(坂原 1995)

(19) その老木は、それでも毎年花をつけてきた。(今仁 1990)

前者の用法となるのは、坂原が規定している通り動詞が「同じ状態の継続」を表わす場合である。後者の用法について、今仁においては、「継続的繰り返しを許す動詞」として「(木が花を)つける、(予算を)繰り越す」などを挙げている。しかし、繰り返しの継続については、時間副詞と共に起ることのできる動詞がこのAspect的意味を取ることができる。

(20) わたしのような不器用な人間は、修理のことを考え地元の自転車屋さんですと買ってきました。

(21) 初めて聞いたときから、すっかり気に入ってしまい、何度も何度も聞いてきました。

(22) イラストに関しても壁にぶつかるたびに何度もあきらめてきました。

ただし、坂原も指摘している通り、「始動Aspectと継続Aspectの両方に解釈できる『Vてきた』は非常に珍しい」のであり、始動Aspectをとる一方向への程度の強弱を表わす無意思性の変化動詞については、繰り返しによる継続Aspectの意味は取りにくい²⁾。

最後に、テイクの継続Aspectについて見ていく。テイクの継続Aspectは「ある時点からの継続」を表わす。坂原も指摘している通り、継続Aspectのテイクはほとんどどんな動詞にも付くことができる。

(23) これからも関連情報を随時公開していきます。

(24) 多くの厳しいご意見を頂きましたが、これからも丁寧にご説明していきます。

しかし、テクルと同様、繰り返しの継続ではなく、同じ動作・事態の継続となるのは、「同じ状態の継続」を表わす動詞に限られる。

(25) 気持ちがこもったこの家を終の棲家として大切に暮していきます。

以上、本研究で扱うテクル・テイクのAspectは次のようなものである。a) 変化動詞および現象動詞にテクルがついてできる始動Aspect, b) 変化動詞にテイクがついてできる過程Aspect, c) 同じ状態の継続を表わす動詞にテクル・テイクがついてできる継続Aspect, 以上3つを考察の対象とする。

4. 始動アスペクトのテクル

このカテゴリには、吉川(1976)における「変化の過程」のアスペクトも含まれている。ここでは、まず、この問題について若干の考察を加える。吉川における「変化の過程」はスル・シタでは変化の過程を表わせない動詞にテクル・テイクがついて過程を表わすものである。一方、始動アスペクトのテクルは、工藤(1995)の動詞分類における「ものの無意思的な(状態・位置)変化動詞(自動詞)」につくものが中心となる。これらの動詞の多くは、結果に焦点を持ち、シテイル形では、変化の結果の継続を表わす。

(26) そうすると洗濯指数の良くない日でもしっかりかわいています。

金田一(1958)の動詞分類ではいわゆる瞬間動詞に当たるものであるが、実際の変化が瞬間的であるかどうかは動詞によって異なる。例えば「あたたまる、かわく」などは結果に至るまでの過程に一定の時間を要する。実際、対応する他動詞「あたためる、かわかす」などでは、結果にいたるまでの過程の方に焦点が持つため、テイルで過程を表わすことができる。

(27) 今茶殻をかわかしています。

一方、同じ変化を表わす場合でも、結果に焦点を持つ自動詞はテイル形では変化の過程を表わすことができない。始動アスペクトのテクルとの共起によって変化の過程を表わすことができるのである。

(28) 僕の走っている間にコースが少し乾いてきました。

(29) 部長の声で、みんなの動きもキレがでてきて、体も徐々にあたたまってきました。

始動アスペクトのテクルは、タ形で発話時もしくは過去を基準時点として見た場合の変

化の開始と基準時点までの継続を表わす。ル形の場合は、未来のある時点を基準とした変化の開始もしくは時間的限定性をもたない変化の開始を表わす。

(30) このままの天気だと、どんどん乾いてきます。

(31) このツボに手を当てているだけで、なんだか体があたたまってきます。

次に始動アスペクトにさらにテイルがついた場合について検討していく。坂原(1995)では、「来る」のテイル形が結果の継続を表わすのに対して、始動アスペクトの「シテクル」は全体で継続動詞となり、進行を表わせるとしている。

(32) 空が、徐々に明るくなってきている。(坂原 1995)

(33) 太郎の芸風が、公演ごとにこなれてきている。(坂原 1995)

また、タ形もテイル形と同様に依然進行中というニュアンスを持つため、入れ替えても解釈はほとんど変わらないとされている。

(34) 空が、徐々に明るくなってきた。(坂原 1995より改変)

(35) 太郎の芸風が、公演ごとにこなれてきた。(坂原 1995より改変)

タ形とテイル形が交代を許すのは、基準時点が発話時の場合に限られるが、以下のような例では両者の違いが見られる。

(36) 準備を済ませて表に出ると南アルプス方面がうっすらと明るくなってきました。

(37) 準備を済ませて表に出ると南アルプス方面がうっすらと明るくなってきています。

前者では、「明るくなる」という変化の開始は表に出た後である。それに対して後者では、表に出る前に既に明るくなり始めていて、その変化の過程のみを目撃したという印

象を持つ。つまり、前者では変化の開始自体を目撃している必要があるのに対して、後者では開始自体は目撃していないのである。

基準時点が過去になった場合、シテイルはシテイタになるが、この場合も同様の違いが見られる。

(38) お天気爽やかでしたが、お昼を過ぎたころから曇ってきました。

(39) 黒部平から室堂へトロリーバスで到着し、外を見ると、曇ってきていました。

以上のように、テイクにつくテイル形・テイタ形は、変化の開始を背景化して、その後に関わり変化の過程の方を焦点化するという働きを持つと言える。

この違いは、ものの非意思的な動き（現象）動詞による始動アスペクトについても同様に見られる。

(40) 小川町駅に集合したころに、ちらほらと雨が降ってきました。

(41) 小川町駅に集合したころには、ちらほらと雨が降ってきていました。

最後に、始動アスペクトのバリエーションについて述べる。

(42) 今年もまた雪が降ってきました。

のような例では、「雪が降る」という1回性の現象の開始ではなく、「雪が降る」ことが繰り返されるといふ反復性を持つ事態の最初の1回を始動アスペクトで捉えている。

5. 過程アスペクトのテイク

過程アスペクトのテイクについて考察する前に、ここでは、始動アスペクトを表わす現象と「ものの無意思的な変化」を表わす動詞にテイクがついた文について検討していく。

まず、現象を表わす動詞にテイクがついたものを、今仁（1990）は、順次的・漸時的意味となるとしている。

(43) その後、雨は断続的に降っていった。（今仁1990）

しかし、今仁自身も「雨は、”雨が降る”という一つの現象でしかなく、一旦事態が生じた後の事態の順次・漸時性が想像しにくい」と述べている通り、結びつけた場合に強いて言えばそのような解釈を持つという程度のものであり、積極的に順次性・漸時性を持つとは言えない³⁾。

一方、変化動詞にテイクがついた過程アスペクトを表わす文は、以下のようなものである。

(44) あんなに晴れていた空が曇っていきます。

(45) 静かに置いておくと、レンネットのはたらきで徐々に乳がかたまっていきます。

これらは、テクルによる始動アスペクトにそのまま対応する文になる。

(46) あんなに晴れていた空が曇ってきました。

(47) 静かに置いておくと、レンネットのはたらきで徐々に乳がかたまってきました。

また「曇っている」や「固まっている」が既に変化が完了した後の結果の継続を表わすのに対して、テイクの付いた形はテクルと同様変化の過程の段階を表わしている。しかし、テクルが始動アスペクトとして変化の開始をはっきり表わすのに対して、テイクの場合には変化の開始はほとんど意識されない。

また、これらの文はタ形を用いて、過去の変化の過程を表わすことができ、ほとんど意味を変えずにテクルと置き換えることができる。

(48) 朝方は晴れてましたが、夕方になるにつれてどんどん曇っていききました／きました。

- (49) 粉状にした花王の石鹸が核になって、少しずつ少しずつ固まってきました／きました。

以上のことから、次のようなことが考えられる。テクル・テイクともに、結果に焦点を持つ「ものの無意思的な変化」を表わす動詞について、その経過に焦点を移すという作用を持つ。テクルは、基準時点から過去方向へ変化の過程を見るという視点を取るため、変化の開始が意識され、始動アスペクトという意味を持つ。一方、テイクは、基準時から未来方向へ変化の過程見るという視点を取るが、変化の完結まではとらえないため、単なる過程という意味を持つ。基準時点が発話時の場合は、この視点の違いが明確であるため、両者の意味の違いも明確である。しかし、基準時点が過去や未来となった場合、発話時からの視点では両者の違いは不明確になるため、ほとんど意味を変えずに入れ替えられる場合もでてくるのである。

次にこれらの形にテイル／テイタがついた場合について検討する。テイクの場合にはもともと過程の意味を持つため、さらにテイル／テイタが付く用例はそれほど多くない。

- (50) 炎天下のせいでみるみるコンクリートが固まっていっています。
 (51) 昨日、一昨日と流し込んでおいたモルタルも良い感じに固まっていました。

テイツェイルの文は、テイクの場合では変化が発話時以前に始まって進行中なのか、発話時以降に始まるものなのかが不明確なのに対して、はっきりと進行中であるという意味になる。一方、テイツェイタの形の文は、テイタに対して「変化の過程を一時的に覗いた」というニュアンスが感じられる程度の違いしかない。

6. 継続アスペクトを表わすテクル

継続アスペクトによって、同一主体による一回性の継続を表わすことができるのは、動詞が同じタイプの継続を表わす場合である。これには、次のような動詞が該当する。まず、変化動詞については、長期的な変化を表わすことができる「成長する、普及する、発展する、慣れる」などである。次に、工藤（1995）の分類で、主体動作動詞の下位分類として「人の長期的動作」を表わす動詞（「営む、通う、暮らす、経営する」等）は全て継続アスペクトとして解釈可能である。さらに、内的情態動詞の「考える、信じる、祈る、願う、望む、あこがれる、恨む」等も継続アスペクトとなり得る。

- (52) 東北開発関連法制定以来、本港の重要性が増し、セメント、木材、石油等の搬入港として発展してきました。
 (53) 私は公共事業に関わる会社を9年間程経営してきました。
 (54) でも自分は、このやり方が良いと信じてきました。

これ以外にも、述語以外の副詞的成分の力を借りて、繰り返しを表わすという形で、多くの動詞が継続アスペクトを表わすことができる。

- (55) 私もこの雑誌をずっと買ってきました。

ただし、本研究ではこのタイプのものは紙幅の関係上扱わない。

坂原（1995）が述べている通り、基準時点となるのは基本的には発話時点であり、「経営してくる、信じてくる」で未来を基準時点とした継続を表わすことはできない（「発展してくる」は始動アスペクトとなる）。また、継続の終止地点も、坂原が「現在から過去に遠ざかるにつれて、許容度は落ちる」と指摘

しており、基本的には発話時まで、もしくは発話時以降も継続する事態を表わす⁴⁾。

継続アスペクトの場合はテクルのみでも継続を表わすため、さらにテイルが付いた場合もそれほど意味の違いは感じられない。

(56) 縁あって、1986年に埼玉県所沢市に、友人と二人で創業。以来、制御系ソフトウェアの請負開発業務を営んできています (きました)。

(57) 10年前前から介護士の資格をもち、病気のお母さんの世話や子育て、そしてボランティアと堅実な生活を営んできています。(きました)。

しかし、子細に見ていくと、以下のような違いも観察できる。まず、現在もしくは近い過去に継続の終止が示される場合は、テイル形ではやや許容度が下がる。

(58) それが、実際に日が暮れる頃になると、しとしとと雨が降るもんだから、私は「にわか雨」=「しとしと降る雨」だと、最近まで信じてきました (**きています)。

一方、テイクがついた場合には、過去のある時点までの継続を表わすことができるようになる。

(59) 少なくとも病院について不効率な点は数多くありましたがまじめに経営してきていました。

(60) 竹は本来、日本人にとってなじみが深く、身近な竹を使って生活を営みながら暮らしてきていました。

7. 継続アスペクトを表わすテイク

テイクの場合も、テクルと同様、長期的変化を表わす変化動詞や、人の長期的動作を表わす動詞、一部の内的状態動詞について、1回性の長期的継続を表わすことができる。

(61) フットサルを、家族や地域で気軽に

楽しめるようなシステムを構築しながら普及していきます。

(62) 私はこの美しい西多摩・青梅の地で家族共々一生暮らしていきます。

(63) 社会人一年目、ラクロスができる喜び、感謝を忘れず社会人ラクロスの可能性、チャンスを信じていきます。

多くの先行研究が示唆している通り、これらはテキタによる現在までの継続と対をなし、過去から発話時までの継続に焦点を当てる場合にはテキタが、発話時から未来に続く継続を表わす場合にはテイクが用いられる。発話時以前に開始され、発話時以降も続く継続の場合は、テイクが発話時以前から続く継続を表現でき、テキタが発話時以降も続く継続を表現できるため、全く同じ継続を視点を変えて2つの文で表現することもできる。

(64) 私は大学卒業以来ずっとこの会社で働いてきました。これからも停年までずっと働いていくつもりです。

ただし、動詞によっては、テキタでは継続アスペクトが表現できても、テイクでは表現できないものも存在する。テイクの方が意思性が強く要求されるため、以下のような場合はテイクで継続を表わすことができない。

(65) 僕は小さいころから警察官にあこがれてきました。／**あこがれていきます。

また、テキタはテクルによって発話時以降の継続アスペクトを表現することはできないが、テイクはテイツタの形で、発話時以前の継続を表現することもできる。

(66) 3人は成長し結婚して、子供達に囲まれ幸せに暮らしていきました。

(67) その港となったのが、桜井の河口港であり、瀬戸内海の交通の拠点として次第に発展していきました。

ただし、テキタが少なくとも発話時近くまでの継続を表わすのに対して、テイツタは発話時のかなり以前に終結した継続しか表わすことができないという違いが存在し、始動アスペクトの場合と違って両者が交替できることはない。

最後に、この用法のテイクに、テイルやテイタがついてテイツテイルやテイツテイタとなる用例はほとんど見つからなかった⁵⁾。

8. 結論

以上、アスペクトを表わすテクル・テイクに、さらにテイル・テイタが付いた場合についての意味になるかについて考察してきた。まず、始動アスペクトのテクルにテイルが付いたテキテイルという形は発話時を基準にしたテキタとほぼ同じアスペクトとなる。これに対して、テイタが付いたテキテイタは、過去の基準点に対して、それ以前に始まった変化という意味でテキタとは明確に異なる。過程アスペクトのテイクについては、テキテイルの形で変化が発話時事前に始まっていて現在進行中であることを表わす。継続アスペクトのテクルについては、テキテイルという形で、テキタとほぼ同じアスペクトを表わし、テキテイタでは、テキタでは表わせない過去のある時点までの継続を表わす。継続アスペクトのテイクについては、テイツテイル、テイツテイタという形はほぼ見られない。

以上のことを、基準点と発話時の関係から

整理してみる。まず、テクルについては、始動アスペクトでも継続アスペクトでも、テキタの形で発話時までの始動や継続を表わす。テイルのついたテキテイルの形は、テンスとしてはほぼ同じである。始動アスペクトについては、同じテキタの形で、発話時以前を基準点とした変化の開始を表わすことができるが、継続アスペクトでは発話時以前を基準点とした継続を表わすことはできない。しかし、テキテイタの形をとることで、発話時以前を基準点とした継続を表わすことができるようになる。

一方、テイクについては、過程アスペクトでも、継続アスペクトでも、テイクの形で発話時または発話時以降を基準とした変化・継続を表わすことができ、テイツタの形で発話時以前を基準とした変化・継続を表わすことができる。しかし、テイクの形では変化や継続が発話時において進行中のものであるかそれとも発話時以降に開始されるものであるかは不定である。テイツテイルの形によって、変化が発話時において進行中であることをはっきりと示すことができる。以上をまとめたものを表1に示す。

表1から、スル・シタの形だけでは、発話時と基準時との関係が表わせない部分や、発話時と基準時との関係が明確ではない部分に、テイル／テイタが使われることがわかる。つまりテクル、テイクは単純にスル形とシテイル形のアスペクト対立を持っているわけではなく、テクル形やテイク形が持つアス

表1 テクル・テイクとテイルの複合アスペクトの分類

	発話時以前	発話時	発話時以降
テクル (始動)	テキタ・テキテイタ	テキタ／テキテイル	テクル
テクル (継続)	テキテイタ	テキタ／テキテイル	***
テイク (過程)	テイツタ／テイツテイタ	テイル／テイツテイル	テイク
テイク (継続)	テイツタ	テイク	テイク

ペクトに応じて、スル形とシテイル形がそれを補う形でより複雑なアスペクトを表現しているのである。

注

- 1) 坂原は、益岡・田窪 (1989) の「意思動詞+来る」が継続アスペクトで、「無意思動詞+来る」が始動アスペクトになるという指摘を引用して、検討している。結果として、継続アスペクトについては、動詞は意思動詞でも無意思動詞でも構わないとしており、始動アスペクトの無意思動詞との親和性のみを一定程度認めている。
- 2) 坂原の例では、始動アスペクト・継続アスペクトの両方の解釈を許す小数の例として、「成長する、慣れる」などが挙げられている。他にも「普及する、発展する」なども両アスペクトの解釈を許す。いずれも、長い時間を要する変化を表わすものであり、継続アスペクトでは、繰り返してではなく、長期にわたる変化の継続という意味になる。
- 3) Googleのフレーズ検索において、“降っています” および “降っていましたが” を検索した結果、該当するような用例は見つからなかった。ヒット数自体も一桁であり、そもそもこの組み合わせ自体がほとんど使われないと考えられる。
- 4) 「10年前の不況で、長年経営してきた会社を、手放した。」のように、非終止の位置では、発話時以前に完了した継続を表わしやすくなる。
- 5) 該当する動詞を「テイテイマス」「テイテイマシタ」でフレーズ検索をした結果、ほとんどの場合ヒット数がゼロで、数件ヒットした場合も継続とは見なせない用法であった。唯一の例外が「付き合う」で、「語学とほんとの縁の

なかった人間がなんとかやっていくには、できるだけ逃げないように、嫌にならない程度に英語と付き合っています。」のように、悪条件にも関わらず何とか付き合っているというニュアンスを持つ継続の用例がいくつか見られた。

参考文献

- 今仁生美 (1990) 「VテクルとVテイクについて」『日本語学 第9巻 第5号』 pp.54-66 明治書院
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクト研究をめぐって」奥田靖雄著『ことばの研究序説』所収 pp.85-143 むぎ書房
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』所収 むぎ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐藤幸恵 (1992) 「現代日本語の補助動詞「- (て) くる」「- (て) いく」の働き」『国文学会誌 21』 pp.33-51 岐阜女子大学
- 坂原茂 (1995) 「複合動詞Vてくる」『Language, Information, and Text 2』 pp.100-143
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 森山卓郎 (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」『論集日本語研究 (一) 現代編』 pp.78-116 明治書院
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』所収 pp.156-327 むぎ書房